
怪盗と探偵

クロ助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗と探偵

【Nコード】

N6128X

【作者名】

ク口助

【あらすじ】

ある日、青子と東都タワーでデートすることになった快斗。お目当ではリニユールされたネオンとその背後に打ち上がる花火であつた。そんな楽しいデート（？）になる筈だったが――思わぬ人物と知り合ってしまう。

序章

「・・・・・・・・・・待てよ、怪盗キッド。」

その少年は
立ち去ろうとするオレの背後で

そう、言い放った。

しかし、
その言葉に驚く事無く、オレは少年に向き直る。

少年の声や仕草
身体に纏う全てが恐ろしい位に幼い子供が見せるものではなかった。

眼光は鋭く
ただ見据えているのは真実のみ。

彼はもう――
幼い少年ではない。

そこに居るのは

『探偵』

ただ一人。

自然と口元が緩まる。

それは探偵も同じだった。

どんな^{マジック}奇術も
名探偵の前では砂上の楼閣^{コイツ}。

その全てを見透かさんとする眼光に
へたな奇術は通用しない。

だからこそ、
面白い。

その対決、受けてたつてやらー。

何度だつてな。

序章（後書き）

短編にするつもりが。笑

どんどん妄想が膨らみ・連載にorz

（´ω、；）あれれー

A 青子とデート？（前書き）

序章投稿から約2カ月（オイオイ
やっと書けましたー！滝汗

A 青子とデート？

よく晴れた秋の空

試験も終わり、クラス中は開放感に包まれていた。

無論、今回の主人公——黒羽快斗もその開放感に浸っていたのだが

ある少女の一言で途切れてしまう。

7

『・・・赤き都の塔、

金剛の幕に包まれし時、

幼き魔人現れ出で

白き罪人暴かれん。』

「・・・おいおい、またかよ。」

少年は苦笑する。

毎度毎度、占いのような予言のようなそれは少し気味の悪い所があ

る。

それもその筈、彼女が云う予言は一度たりとも外れた事が無いのだ。

彼女——紅子曰く、邪神ルシュファアが告げたものらしいが・・

「・・・今回は予告日では無いけれど・・予言が出た以上・・用心することね。」

そう、今夜も

その次の日もキッドは予告をしていない。

それはキッドである快斗が試験前で忙しかった事に関係があるわけだが、

兎に角、

紅子自身も何故、突拍子もなく邪神が予言を告げたのか・・分から
ないのだ。

理解出来ない分、不安要素は幾らでも増え続ける。

だからこそ、用心をしなければならない。ならないのだが・・

当の本人は余り気にしていないという様子で、いたって通常運転、
通常営業。

キッドとして舞台上に上がるならまだしも、普段の、黒羽快斗（こ
の姿）で追い詰められる事などないだろうと思っているのか……—
まあ、それは本人にしか知り得ないが。

そんな様子では
実際、心配したこちらが馬鹿馬鹿しくなってくる。

その後、紅子がこれ以上その件について触れる事はなかった。

放課後――

幼なじみの青子が気晴らしにと珍しく誘ってきた。

お目当ては今日の夜から始まる
東都タワーの新しいネオン。

一つ一つの色に願いが込められた七色のネオンで東都タワーを彩る
というもので、初回の今夜だけはタワーのバックで花火を打ち上げる
イベントがらしく

女子達の間ではその話題が持ち切りであった。

そして更に、タワーの0時の消灯を好きな人と見ると恋が成就する
というものがあるらしい。実際に成就したカップルがいたかどうか
は定かではないが。

彼女達からすればネオンよりそちらに興味があるのだろう。

そもそも

何故、青子が快斗を誘ったのか。

理由はある人物の企みにあった。

青子と快斗は普段、

一緒にいることが多い。

が、

彼らに両想いの自覚がなかった。

まあ、他者から見れば両想いであるのは分かりきった事なのだが。

その手の疑問を訊いてしまうと
二人の仲は発展せずに

「バ快斗」

「アホ子」

などと言う痴話ゲンカに発展しかねない。

そこで、

業を煮やし、行動を起こしたのが
青子の親友・桃井恵子^{モモイケイコ}である。

恵子は

己に対してネオンと一緒に見に行こうと云う、青子にそつと耳打ちした。

(・・・私なんかより、彼といけば?)

「・・・え!?!」

青子の頬が一瞬にして赤くなる。

十中八九、

彼女の思考には黒羽快斗^{かれ}が浮かんでいるはずだ。

「・・・なっなんで青子と快斗が!?!」

やはりか――

恵子は悪戯っ子のような顔でニマリと微笑んだ。

「．．やっぱり、快斗くんに行きたいんじゃない？」

「．．ちっちち、違うわよ!？」

図星と言わんばかりに声が裏返っている。これでは説得力は皆無だ。

恵子は顔を真つ赤にした青子をなだ宥めた。

「．．まあまあ、試験も終わったんだから。楽しまなきゃ」もしかしたら、快斗くんも青子と行きたいなんて．．思ってるかもよ!」

「．．．．．そ、そうかなあ。」

顔を赤らめさせているのは相変わらずだが、どうやら上手くいったようだ。

そそくさと

恵子のもとを離れ、机で爆睡中の快斗の所へ向かって行った。

そう、

青子が珍しく快斗をデート（と言っても青子は快斗にそれを秘密にしているが．．）に誘ったのは

密かにそのような恵子の良心から生まれた企みがあったに他ならぬ。
い。

「・・・待ち合わせ時間、遅れちゃダメだからね！」

「・・・へいへい。」

別れ際、青子は快斗に念を押した。

快斗が遅れてくる事はあまり無い事だが、一応念には念を入れなければ。

それだけ、青子は

久しぶりの休暇、そしてデートに胸を躍らせていたのだ。

今回のデートは

と言ってもデートは2回目。

1回目のデートはキッド＝快斗という説が浮上し、それを明確とせ

んとしてした事だった。

だからといって、
楽しめなかったというわけではない。むしろ、初めてのデートは楽しめたし
加えて快斗がキッドではないと確信できたのだ。一石二鳥とも言えるだろう。

「．．妙に張り切ってんなー．．青子のやつ。」

彼女は鼻歌混じりに離れてゆく。
少し離れた後、振り返って手を振っている。

そんな彼女の様子を見て、快斗は半ば乾いた笑みを浮かべていた。

金剛の幕に包まれし時
幼き魔人現れ出で
白き罪人暴かれん。
』

予言まで

あと、数時間——

A 青子とデート？（後書き）

小説が進まなかったのは作者の多忙と音楽鑑賞（？）に原因がある
と思われます。汗

すみません。滝汗

しかしぶつちやけ、これからどんな展開になるのか……
クロ助本人にも解りません（＾Ｏ＾）／

お前の人生それでいいのかorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6128x/>

怪盗と探偵

2011年12月5日05時46分発行